

東京方言が他地域方言に与える影響

— 関西若年層によるダカラの受容を例として —

小西いずみ

1. はじめに

本稿の目的は、東京を中心とした地域の話しことば(「東京方言」と呼ぶ)が、関西方言に与えた影響の一端を示すことにある。具体的には、いわゆる接続詞のダカラ・ダケド・ダッテが、現在の若年層に受容されていることを指摘する。特に、ダカラについての考察を中心に、形式だけでなく、用法においても、東京方言と一致するようになったことを述べる。資料としたのは、既刊の3つの談話資料『全国方言資料』『方言談話資料』『関西・若年層における談話データ集』である。

加藤正信(1974)や小林隆(1996)は、日本の方言が、「システム」から「スタイル」へ変質したと指摘している。かつて、方言は、一地域で行われるひとつの言語体系(システム)としてとらえることができた。しかし、現在は、地域社会での私的場面で使われる一つの文体(スタイル)へと性格を変えたという。私的場面で使われるのは「方言」、公的場面で使われるのは「標準語」または「共通語」ということになる。さらに、真田信治(1996)は、「標準語」と「方言」の間に位置するコードとして、「ネオ方言」を置くことを提唱している。ここでは、「ネオ方言」という概念を認めるかどうかについては保留し、地域社会での私的場面・カジュアルな場面で使われる話しことばの総体を「方言」、公的場面・フォーマルな場面で使われる話しことばの総体を「標準語」とする。本稿が目するものは、私的場面での話しことばとしての「方言」が、東京方言に、どのような影響を受けているかという問題である。また、そのような東京方言化が認められた場合、その要因を何に求めるべきかということも考えていく。

ここで扱う言語形式ダカラ・ダケド・ダッテは、次のような性格を持つという点で、上のような意味での「方言」の変化を見るという本稿の目的に適している。まず、ダカラは、書きことばや改まった場面でのスピーチなどにも使われるが、後述するように、対話でのみ見られる用法がある。ダケド・ダッテはかたい文章や改まった場面では使われず、カジュアルな場面での話しことばを中心に用いられる。

2. 「だから」の歴史と地理的分布

2.1. 接続詞ダカラの成立

談話資料の用例を検討する際の着眼点を明らかにするために、まず、本節で「だから」の歴史と地理的分布を、次節で東京方言のダカラの用法を確認する。

<指定辞ダ+接続助詞>という接続表現形式から、接続詞ダカラ・ダケレドモ(ダケレド・ダケド)・ダガ・ダッテなどが成立したのは、近世後期から近代にかけてのようである(青木1981)。ダカラの早い時期の例としては、滑稽本『七編人』五編(文久3年[1863年]刊)に数例あることが知られている(湯澤1954, 田中1984)。下がその1例である。

- (1) 此方は夜食一じきで朝飯と昼飯をくはねえもんだから、洗湯へはいつて帰て来ると、忽地腹はへつこりサ。然から先熱盛にして十三盞と遣らかしたが、
滑稽本『七編人』五・下¹

上方語では、江戸語に先行してジャニヨッテ・ジャガなど、ジャ(チャ)を前部要素とする接続詞が成立していたようだ(湯澤1954, 青木1981)。山口堯二(1996)は、これらの<指定辞ダ・ジャ+接続助詞>形式が接続詞化した原因の一つを、<指定辞+接続助詞>という形式が、前件の「句的判断をより強く対象化できる分析的な形式として句と句の接続に用いられたことに求めることができる」(p.122)としている。

2.2. 『方言文法全国地図』による「だから」の分布

上方では、天保ごろ、ジャからヤが生まれ、明治に入って急速にヤが一般化していった(前田編1964, 金沢1998:13-27)。ところが、いったん<ジャ+接続助詞>型の接続詞が成立していたにも関わらず、<ヤ+接続助詞>型の接続詞は成立していないようだ。この点を含めて、東京方言のダカラに相当する形式の方言分布を確認してみよう。

『方言文法全国地図』第1集(国立国語研究所1989, 以下GAJとする)には、接続詞「だから」の分布図が収められている。第33図が「だ」部分、第34図が「から」部分の地図である。質問文は、「孫に、注意したのに間違いをおこしたので、『だから、するなどと言ったじゃないか』というときの『だから』のところはどのように言いますか」である。これによると、<指定辞+接続助詞>という語構成の形式が分布するのは、北海道・関東・山陰(指定辞がダの地域)、中国・九州(指定辞がジャの地域)などに限られ、そのほかの地域には<ソ系指示語(ソ・ソソ・ホンなど)+指定辞+接続助詞>という語構成の形式が分布する²。例えば、北陸から関西にかけてはソヤサカイ・セヤサカイニなど、四国ではホンジャケン・ソジャキニなどがある。ただし、西日本にはダカラもいくつか点在している。これらの接続詞の構成要素のうち、<指定辞>部分は、ダカラのダが点在する点を除けば、『日本言語地図』(国立国語研究所1966)第46図の分布とほぼ同じであり、<接続助詞>部分はGAJ 第33図「雨が降っているから、行くのはやめろ」の分布とほぼ同じである。

接続詞「だけど」については、「けど」部分の分布図(第39図)のみが収められている。解説によれば、「だ」部分の分布は第33図とほぼ同じだという。

3. ダカラの用法

ここで、現代標準語および現代東京方言におけるダカラの用法を検討しておく。

ダカラは、一般に、前件Pと後件Qが〈原因—結果〉や〈理由—帰結〉という意味関係にあることを示す接続詞とされる。接続詞ダカラは、森田良行(1996:608)の指摘のように、「P(ダ)カラ、Q。」という、接続助詞カラを用いた一文に言い換えることができる。

しかし、蓮沼昭子(1991)³や加藤薫(1995)が指摘するように、対話で用いられるダカラにはこれにあてはまらないものがある。下の(2)(3)があてはまる例、(4)(5)があてはまらない例である。(2)(3)は接続助詞カラによって(2)'(3)'のように言い換えられるが、(4)(5)は言い換えられない。なお、(2)～(5)は蓮沼(1991)による例で、うち(3)～(5)は、蓮沼がテレビドラマや映画のシナリオから採った用例の孫引きである。[]内に蓮沼(1991)の用例番号を示す。

- (2) A: あの人たち、夏休みに3週間も沖縄に行っていたんだって
B: だから、真っ黒に日焼けしているんだね [9]
- (3) 由子「私には、よく分かったのよ、桐子が秋山さんを好きだって気持ちが……」
桐子「だから、どうだって言うの？」 [12]
- (4) 幸子「産むもの」
耕一「いいか。俺は、子供がほしいけど」
幸子「だから、産むから」
耕一「お前が、死んじまったら、なんにもならないだろう」 [15]
- (5) なおこ「やっぱりついて行く」
美津子「ダメよ。仕事の話だから」
なおこ「誰なの？」
美津子「だから仕事の仲間」 [21]
- (2)' あの人たち、夏休みに3週間も沖縄に行っていたから、真っ黒に日焼けしているんだね。
- (3)' (あなたに、桐子が秋山さんを好きだって気持ちが)よく分かったから、どうだって言うの？

本稿では、(2)(3)のようなものを〈理由—帰結〉用法、(4)(5)のようなものを、非〈理由—帰結〉用法と呼ぶことにする。両者は、「ダカラの前の発話あるいは状況から読みとれる命題Pと、ダカラの後の発話Qとを、接続助詞カラで接続した『P(ダ)カラ、Q。』という一文に言い換えられるか否か」という基準で区別される。(1)などの初期の例には〈理由—帰結〉用法しか見られないことから、非〈理由—帰結〉用法はのちになって生まれたと考えられる。それが、いつごろ、どのようにかは明らかでない⁴。

繰り返しになるが、〈理由－帰結〉用法のダカラの機能は、前の発話や状況に含まれる前件Pと後件Qの意味関係を示すことにある。この機能は、「ダ」が前件を対象化し、「カラ」が前件と後件の意味関係を示すという、各構成要素の機能を合成したものと言える。前件 P と後件 Q の関係を示すものであるという点から、一般に言われているように「接続詞」に属する。一方、非〈理由－帰結〉用法のダカラは、各構成要素の機能の合成と捉えることができない。この点で、この用法のダカラは、より単純語らしさを備えている。このダカラは、前件と後件の関係を示すとは言いにくいので、「接続詞」とすることができない。加藤薫(1995)は、本稿の非〈理由－帰結〉用法のダカラにあたるものを2項4類に分類した上で、それらには一貫して「自らの『言わんとすること』を通じていいはずのものとして相手に提示しようとする話者の姿勢」(p.25)が認められるとした。このような話者の心的態度の明示が、非〈理由－帰結〉用法のダカラが持つ機能と考えられる。

現段階では、どちらの用法のダカラにおいても、より妥当性のある意味・機能の記述がされる余地がある。しかし、本稿ではそれらには立ち入らず、上の基準によって二用法を区別するに留める。この区別だけでも、関西方言における形式・用法の変化を示すという本稿の目的には足りるためである。

4. 資料について

本稿では、次の3つの談話資料において、どのようなダカラ相当形式が使われているか、それらの形式に上の二つの用法が認められるかを検討する。

資料1 『全国方言資料』(日本放送協会(編) 1966-67 日本放送出版協会)

大阪・京都・兵庫・奈良の各地点。指定辞ダ使用域の地点(兵庫県城崎郡城崎町飯谷)は除く。

資料2 『方言談話資料』(国立国語研究所 1979-80) 京都・奈良

資料3 『関西・若年層における談話データ集』(真田信治・井上文子・高木千恵 1999)

資料1は、1950～60年前後に収録された、原則として収録時55～69歳の話者による談話資料である。資料2は、1975年前後に収録された、主に明治から大正生まれの話者による談話資料である。この二つは全国規模で収集されたものだが、本稿では、資料3の話者の出身・居住地域にあわせ、大阪・京都・兵庫・奈良の地点のみを対象とする。資料1、2とも、録音テープを聞いてテキストとの異同を確かめ、異なる場合はテープによった。資料1では、「自由会話」とともに「あいさつ」からも用例をとった。「あいさつ」は多少の演出を加えたものだが、本稿で扱う接続詞および指定辞に関しては、「自由会話」と「あいさつ」とで差がないと判断したためである。山口編・監修(1994-95)のテキストに収録されているものは、そちらを主に参照した。用例の所在を示すにあたっては、もとのテキストを“N”，山口編・監修のテキストを“Y”とする。資料2では、老年層どうしの会話(2, 4巻)から用例をとった。資料3は、1973～74年生まれで、関西地方(大阪・兵庫・京都・奈良)で言語形成期を過ごし、収録時

(1993～96年)も関西地方に住む同性どうし2人による、11の対話から成る。談話1～5が女性、談話6～11が男性である。収録時の話者の年齢は20歳前後ということになる。この資料の録音は未聴で、テキストのみを参照して用例をとった。収録場所(話者の自宅や飲食店)や話題から、親しい間柄でのリラックスした自然な対話であることがうかがえる。なお、真田(1999)は、『若年層』の話者が運用しているスピーチスタイルを「ネオ方言」とみなしているようだ。しかし、本稿では、若年層の私的場面での話しことばは、それが「伝統的な方言コード」とは違ってしようと、彼らの「方言」とみなすという立場をとる。よって、『若年層』は関西若年層の「方言」の資料とみなす。

GAJの質問のダカラは<理由-帰結>用法と言え。よって、GAJに出現した形式が非<理由-帰結>用法も持つかどうかは分からない。非<理由-帰結>用法の有無をGAJのような翻訳式の質問によって調べるのは困難である。談話資料の用例分析は、この点で有利である。資料1や2を調べる意味はそこにある。資料3からは、現代の若年層がどのような形式を用いるかを知ることができる。

次節では、3つの資料で使われているダカラ等の使用数を示し、各形式の用法を検討する。以下では、共通語・東京方言でダカラと訳することができ、かつ、語構成が<(指示語+)指定辞終止形+順接確定条件を表す接続助詞>のものを、「だから」相当形式と呼ぶ。同様に、「だけど」と訳することができ、かつ、語構成が<(指示語+)指定辞終止形+逆接確定条件を表す接続助詞>のものを、「だけど」相当形式と呼ぶ。構成要素の<指定辞>には丁寧形デスも含めることにした。ただし、これは、資料1に数例見られたただけであった。用例を示す際、共通語訳はどれもテキストのままにし、疑問点などは注で示した。「だから」相当形式の訳がテキストで「そうだから」等になっている場合もあるが、いずれも「だから」に置き換えられる。不明瞭な部分の注記と音調表記は省略した。用例数に関しては、採取にもれがあったり、人によって用例の認定に差が生じたりするだろうが、大勢に影響はないと考える。

5. 関西方言談話資料における「だから」

5.1. 全国方言資料

『全国方言資料』では「だから」相当形式があまりない。用例が得られた地点の形式と出現数、使用例を下に示す。「だけど」相当形式も参考として示す。ほかの地点、京都府京都市(4巻)・奈良県吉野郡十津川村小原(8巻)・奈良県吉野郡下北山村上桑原(8巻)では、「だから」「だけど」ともに得られず、奈良県山辺郡都祁村(4巻)では、「だけど」相当のソヤケド・セヤケドあわせて4例のみが得られた。

大阪府大阪市(N4巻, Y3巻) 収録1953年

話者 m:1898年生・男・僧侶, f:1888年生・女・画家夫人

「だから」 ソヤサカイ : 1例→(6), ソーデスヨッテニ : 1例→(7)

「だけど」 ソヤケド : 2例, ソーデッケド : 1例

兵庫県神崎郡神崎町栗賀(N4巻, Y2巻) 収録1958年

話者 M:1885年生・男・農業, F:1889年生・女・農業

「だから」 ソヤケン : 1例→(8)

「だけど」 ソヤケド : 9例, ジャゼド : 1例

(6) m ウン オーサカマツノウチヤ, ジューゴンチマデ イーマスケドナ
うん, 大阪では松の内は 15日までだと 言いますけれどね。

f ソー ソー マツノウチナー……
そう, そう, 松の内ね……。

m ンー トーキョーワ, トーキョーワ ヨーカマデヤソーッスネ
うん, 東京は, 8日までだそうですね。

f アー ソーデッカ (m ウン)エー, ソーデッカ
ああ, そうですか。 そうですか。

m ソヤサカイ ハヤナツテキマンネ ダンダン
だから 早くなってくるんですね, だんだんと。

Y3巻, p.117 (N4巻, pp.197-8. 該当部分が「ソヤカイ」となっている)

(6)' 大阪では松の内は15日までだと言うけれど, 東京では8日までだから, (大阪でも東京流にやる人がいて)だんだん早くなってくるんですね。

(7) (浪花橋南詰で「高等アイスクリン」を25銭で売っていたという話題)

f アイスクリン ウツタタ, アレガ アンサン アノジブンニ イッシェンカナナー ゴリンカ
アイスクリームを売ってた, あれがあなたあの頃 1銭か, 5厘か

ソナンデシタヤロ (m エーエー エー) ソノジブンニ, ニジューゴセン
そんなものだったでしょう。 その頃に 25銭

トリハリヤンノヤガナ (m ソーデスカ) ソーデスヨッテニ ヨッポドノナー
お取りになるんですよ。 そうですから, 余程のね,

オヒトヤナイトナー イキャハリマセンノダス サー
お方でないとね, いらっしやいませんですよ。

Y3巻, p.119 (N4巻, pp.203. 該当部分が「ソーデシヨッテニ」となっている)

(7)' ふつうのアイスクリンは1銭か5厘だった頃に, 高等アイスクリンは25銭とるのだから, 余程の人でないと(買いに)いらっしやらないんですよ。

(8) (二銭というのは当時十分な額のお金だったという話題)

F ホヤカ⁵ コドモニヤッタラ マー エーニ オルトキナンゾヤッタラ マ ニセン
そうだから子供にだったら、まあ 家におる時など(で)あったら まあ二銭

モローテ ゴリンノ ダエータラ オーケナ カシガ アリヨッタハケナー
貰って 五厘(を)出したら 大きな 菓子が あっていた⁶からなあ

ソヤケン ヨソニ ミヤールユータラ モー ニセンヨリ コズキャエー
そうだから 他所に 参る(と)言ったら、もう 二銭しか 小遣い(は)

モラエヨラヘナンダガナー

貰えていなかったがなあ Y2巻, p.137. (N4巻, p.282)

(8)' 五厘出したら大きな菓子がもらえた頃だったから, 他所に行くと言え、二銭しか小遣いがもらえなかった(が、それで十分だった)がなあ。

ヨツテニを構成要素とする形式が GAJの大阪府下になく、ソヤケンがGAJの兵庫県下になく、GAJと異なるが、どれも語構成が<指示語+指定辞+接続助詞>という点ではGAJと一致する。

これら3例は、どれも<理由-帰結>用法と言え。 (6) (7) (8)を、共通語で簡単にまとめて「P(ダ)カラ, Q.」に言い換えれば、それぞれ(6)' (7)' (8)' のようになる。

5.2. 方言談話資料

『方言談話資料』では、下の地点から「だから」相当形式が得られたが、京都府綾部市高槻町字観音堂・桜(4巻)では「だから」相当がなく、「だけど」相当のセヤケド3例、ホヤケド1例のみ得られた。

奈良県吉野郡十津川村那知合・谷垣内(2巻) 収録1975年

話者 A:1922(T11)年生・男・農業, B:1902(M35)年生・男・農業,

C:1923(T12)年・女・農業, S(司会役):1925年(T14)生・男・教員,

K(介添役):1900(M33)年生・男・農業

「だから」 ジャースカ: 4例 (全て話者A) →(9) ほか p.41, p.61, p.80

ソレジャースカ: 1例 (A) →(10)

ホンジャースカ: 1例 (A) →p.80

ソジャカラ: 1例 (K) → p.97

ダカラ: 6例(S 5例, A 1例) →(11)(12) ほか p.49, p.51に2例, p.62

「だけど」 ジャーケド: 2例, ジャケドモ: 1例

- (9) A ホシテノー ヤッパリ ホンデノー ソガー シテ オレラジブン ジャッターラノーラ
 そしてね 矢張り それでね そんなにして 俺等時分 だったらねえ
 コドモジブンカラ ソガー シテ ヤマハラーモ イタリ シツロー。 ジャースカ
 子供時分から そんなにして 山払いも 行ったりしたろう。だから
 ホンデノー ヤッパリ コー ヤマオ アイスルチューノカ キモチガ
 それでね 矢張り こう 山を 愛するというのか 気持が
 ワクンジャーノー。
 湧くのだね。(P.80)

(9)' 俺らの頃だったら、子供の時からそのように山払いに行ったりしたから、山を愛する
 というような気持ちが湧くのだねー。

(10) (最近盆踊りをしなくなったという話題)

- A モー ホテ ナンジャーゼ。ワカー コニ ユータッテ ショーン アノ ムリヤー
 もう そして 何だぜ。 若い 子に 言ったって 仕様が あの 無理は
 ナーデ。ノーラ。ソリヤ ヤッパリ ナンジャーゼ。モトシヨリガ サキニ
 無いよ。ねえ。それは 矢張り 何だぜ。 もう 年寄りが 先に
 タッテ モー ドガーナケリヤー。オマエ ヒチ ヒチハチネン ツイ カレコレ
 立って もう どんなであれば。お前 七 七八年 つい かれこれ
 ジューネングライ モー オドランジャ ナーカ。
 十年位 もう 踊らないのではないか。

S ジャローノー。
 だろうねえ。

A ノーラ。
 ねえ。

S ジャロ。ジャロ。タニウチデ オドリョールチューノ キータ コト ナーワ。
 だろう。だろう。谷内で 踊っていると言うの 聞いた事(が)無いわ。

A ナーゼノーラ。 ソレジャースカ モー シリヤー センガナ。ワカー シラニ
 無いぜねえ。それだから もう 知りは しないよ。若い 衆等に
 ユータッチッテノーラ。
 言ったと言ってねえ。(Pp. 108-9)

(10)' かれこれ10年ぐらい踊っていないのだから、若い人に言っても知りはない。

(11) S (略:山を売れば金が入るだろうとの主旨) ケドモ ヒトツニワ アノー ヤッパリ
 けれども 一つには あのー 矢張り

ジブンタチガ クー タメニ ヤマオ ウルチューコトワ コリヤー ソノー イエノ
 自分達が 食う 為に 山を 売ると言う事は これは その 家の
 ハジジャトカ ソー ユー モノガ タブンニ アツタンジャ ナイカ。ダカラ
 恥だとか そう言う ものが 多分に あったのでは無いかな。だから
 ナカナカ ソノー ヨッポドデ ナケリヤ ヤツパリ ヤマオ ウルチューヨーナ コトワ
 なかなかその 余程で 無ければ 矢張り 山を 売ると言う様な 事は
 アノー カッコー ワルイ コトヤトカ ユーコトガ アツカモ シランシ (後略)
 あの 恰好 悪い 事だとか 言う事が あったかも 知らないし (P. 51)

(11)' 自分達が食うために山を売るとするのは家の恥だというようなことがあったから、余程でなければ、山を売るとようなことは(なかったのではないかな。)

(12) (山での農作業の話題)

B トニカク ベンリーガ ワルカッタ。
 兎に角 便利が 悪かった。

S ウン。ダカラ モー……。
 うん。だから もう。

B ベンリガ ワルイカラ ソー ナルンジャ。
 便利が 悪いから そう なるのだ。 (P. 54)

表1 『方言談話資料』奈良県吉野郡十津川村那知合・谷垣内における
 指定辞の使用数^{a)} (デス、「だから」「だけど」相当形式の構成要素を除く)

話者	生年・性	ジャ (%)	ヤ (%)	ダ (%)	他* (%)
A	T11男	152	8	1	4
B	M35男	58	9		7
C	T12女	31	31		2
S	T14男	57	12	1	
K	M33男	28	17	1	
計		326 (77.8)	77 (18.4)	3 (0.7)	13 (3.1)

*他 コツチャ(事だ), ~ンニヤ(~N/+だ)など, ヤカジャの異形態。

以上のように、奈良の談話からは用例が比較的多く得られたが、使用者は話者AとSに偏っている。話者Aは、表1の指定辞の使用数から、発話が他の話者よりも多いことがうかがえる。これが、話者Aの接続詞の数が多い一因だろう。話者Aが主に使用しているのは「ジャースカ」と「指示語+ジャースカ」である。スカは接続助詞としても多く使われている。GAJでの吉野郡の分布状況を見ると、これらの形式は見られないものの、指示語を伴うものと伴わないものが並存するという点は一致している。(9)(10)などの、ダカラ以外の4形式7例は、

どれも<理由-帰結>用法と解釈できる。(9)(10)を、それぞれ「P(ダ)カラ、Q。」に言い換えれば、(9)'(10)'のようになる。

ダカラを5例使用した話者Sは、教員であり、他の話者が農業従事者であるのと異なる。この談話では「司会役」ということになっているが、自らの意見を述べるなどした長い発話も少なくない。しかし、指定辞の使用数(表1)では、ジャとヤがほとんどを占めている点で、ほかの話者と変わりが無い。つまり、ダカラの受容は、指定辞ダの受容に伴うものではないことが分かる。ダカラは、一語として受容されたのだと考えられる。

用法を見ると、6例のうち、(11)を含めた4例が<理由-帰結>用法のダカラである。(11)は、後件である帰結の述部が完結しないまま、「アノー」以下が理由の補足説明にすり替わっていると解釈できる。帰結の述部を補って「P(ダ)カラ、Q。」に言い換えれば(11)'のようになろう。残る2例は、話者Sによるもので、(12)を含めた2例である。どちらも、他の話者の発話にさえぎられたためにダカラのあとが言いさしになった例で、どちらの用法か判断できない。ただし、どちらも、話者Sの言わんとすることを他の話者が理解していないというような、非<理由-帰結>用法であることを示唆する文脈上の特徴はない。

以上により、『全国方言資料』『方言談話資料』では、ヤ・ジャを構成要素とする「だから」相当形式が<理由-帰結>用法でしか使われていないことが分かった。この結果は、これらの従来形式には、非<理由-帰結>用法しかなかったことを示唆する。談話資料で用法が得られないからといって、それが当該方言にないと結論することは難しいが、少なくとも、従来の関西方言では非<理由-帰結>用法が多用されることはなかったと言える。『方言談話資料』の奈良県十津川村の談話では、一部の話者がダカラも使っているが、これにも非<理由-帰結>用法らしい例はなかった。

5.3. 関西・若年層における談話データ集

次に『関西・若年層における談話データ集』(以下『若年層』)によって、現在の若年層の使用状況を見る。表2に、指定辞と「だから」相当形式等の用例数を示す。なお、表2のダカラの数には、ダカ((13)など)、ダ(談話4-65A など)、ダカー(談話5-42A など)、ダーラ(談話9-138A)のような、はっきり発音されなかったと思われる例を含めてある。ダッテの数にもダテ(談話3-95B など)を含めている。

表2から、「だから」相当形式がダカラのみであることが分かる。(13)~(15)に例を示す。「だけど」相当もダケドが多く、従来のような形式は、セヤケド1例である。この資料では、先の2つの資料では見られなかった、接続詞ダッテが用いられている点も注目し値する。(16)に例を示す。『方言談話資料』とは異なり、ダカラ等の使用が少数の話者に偏っているわけではないことから¹⁰、これらは関西若年層に広く用いられている形式であると言える。

表2 『関西・若年層における談話データ集』における、指定辞・ダカラ等の使用数

話者	指定辞				話者	指定辞							
	ヤ	ジャ	ダ	セヤケド		ヤ	ジャ	ダ	セヤケド				
談話1 A	25			3	1	談話7 A	33			7	4		
女 B	28	1			1	1	男 B	21			2		
談話2 A	31					談話8 A	15			9	1	3	
女 B	18		1	2		男 B	28			1	1		
談話3 A	27	1				談話9 A	37			3	1		
女 B	26				1	男 B	30			4	5	1	
談話4 A	12			2		談話10 A	18	2		3			
女 B	4					男 B	13				2		
談話5 A	38			7	2	1	談話11 A	48	1	1	2	1	
女 B	8					男 B	23	1		12			
談話6 A	37		1	1									
男 B	16			3	1	計	536	6	3	61	5	21	1

(13) 96B: ンー。フーン。ア、コンピューター マニアワヘンカッタ ッテ
んー。ふーん。あ、コンピュータ(の授業)間に合わへんかったって

ユッタツケ?
言ったつけ

97A: ウン。キータ。
うん。聞いた。

98B: ソ ダカ スイヨーノイチジカンメガ アクネン。
そう)だから)水曜の一時間目が空くねん。(談話2, p.21)

(13)' コンピューターの授業に間に合わなかったから、水曜日の1限があくのだ。

(14) 134B: ケツキョク ナンカ オレ メンキョ トツテカラ ロクニ クルマ
結局なんか俺(は)免許(を)取ってからろくに車(に)

ノッテナイワ ホンマ。ニカゲツ タツテモータ。
乗ってないわほんま[本当](に)。ニヶ月経ってもうた[経ってしまった]。

135A: ア メンキョ モッテンノカ イチオー。
あ免許(を)持ってんのか[持っているのか]一応。

136B: トッタヨ。
取ったよ。

137A: アー。
あー。

- 138B: ダカラ, ナツカラ, コトシノナツカラ カヨーテー, …デー,
だから, 夏から, 今年の夏から通うてー, でー,
ジューチカツマデ カカッタ(笑)
十一月までかかった。(談話6, p.76)
- (15) 12B: (略) セヤケド イマ アレヤナ, ショーガクセーデモ モーアイツラノ
せやけど(そうだけど)今あれやな。小学生でも もうあいつらの
チシキ ッテ ユーノワ スゴイヨ。
知識っていうのはすごいよ。
- 13A: ドーユーチシキ。
どういう知識。
- 14B: オレラガ チューガクセーデ ナラウヨーナコト ヤッテンモン。
俺らが中学生で習うようなこと(を)やってんもん[やってるもん]。
- 15A: ドンナヤツ ヤッテンノン。
どんなやつ(を)やってんのん。
- 16B: ダカラ レンリツホーテーシキ。トカ。
だから連立方程式。とか。(談話9, p.108)
- (16) (箕面市は, 吹田市に比べて, カッコワルイという話題で)
- 119B: ナンデー? ミノーモ ナンカ イチオー シーヤデ トカ イッテ(笑)
なんでー? 箕面もなんか一応 市ーやで とか言って
- 120A: {笑}イチオーヤロ?
「一応」やろ?
- 121B: {笑}
- 122A: ダッテ ミノート スイタノカンジノ クラベテー ナンカー。ミノー, ヤロ?
だって箕面と吹田の漢字の, 比べてーなんかー。箕面, やろ?(談話5, p.58)

この資料では, 順接確定条件を表す接続助詞としてカラが使われている。これは, ダカラの構成要素の<接続助詞>部分と形態上一致する¹¹。だが, 表2から分かるように, 指定辞はヤが圧倒的に多く, 文中で体言を承ける接続表現「～だから」の場合も, 次の(17)のように「～ヤカラ」が用いられている。この点から, 『方言談話資料』と同様, ダカラは, 一語として受容されたと言える。「～だけど」の場合も「～ヤケド」が用いられていることから, ダケドにも同様のことが言える。

- (17) 18B: ヤ オレ アンマリ タベモノニ ドーコー ッテ アンマ
や俺(は)あんまり食べ物に(関して)どうこうってあんまり)

ユエヘンヒトヤカラナー。

言えへん[言わない]人やからなー。(談話6, p. 69)

ダカラの用法を見ると、ダカラの全61例中には、(13)のようなく理由-帰結>用法とともに、(14)(15)のような非<理由-帰結>用法がある。これは、前の2資料には見られなかったものである。文脈を十分理解できない箇所があるため、全例を用法分類することは難しいが、疑問例を除くと、非<理由-帰結用法>は、約半数の28例になる。

以上のような使用状況から、接続詞ダカラ・ダケド・ダッテは、すでに、関西若年層にとっての「方言」-カジュアルな場面での話しことば一の語彙に含まれていると考えられる。3節で述べたように、非<理由-帰結>用法のダカラは、<指定辞+接続助詞>という構成要素への分解が不可能な意味・機能を有する。そして、5. 1と5. 2で見たように、関西方言の従来形にはこの用法がなかったようだ。この2つの事情が、指定辞ヤを保持したまま、ダカラを一語として受容した一因と考えられる。<理由-帰結>用法にセヤカラを用い、非<理由-帰結>用法にダカラを用いるというような機能分担が行われなかったのは、二つの用法に連続性があるためだろうか。現段階では分からない。

ダッテの受容についても、ダカラと同様の事情が考えられる。ダッテは、ダカラ以上に一語としてのまとまりが強く、語源である副助詞ダッテとも意味が隔たっている。また、資料1と2を見る限り、従来の関西方言には、ダッテに近い意味・用法¹²を持つ形式がないようだ。今後、ダケドの用法についても検討したいと考えている。

なお、以上の結果から、関西若年層の「方言」の「だから」相当形式はダカラのみであるという結論を導びくことはできない。というのは、『若年層』には同世代どうしの対話という制限があるからである。『若年層』の話者が、高・中年層との対話においても、ダカラ・ダケド・ダッテを使用するのかどうか、現段階では分からない。

6. おわりに

以上、従来の関西方言にはない東京方言形ダカラ・ダケド・ダッテが、現在の関西若年層に受容されていることを示した。

このような東京方言の受容が起こるのは、東京方言が「全国共通語」としての機能を持つこと、東京方言が威光(prestige)を持つことに起因すると考えられる。現在、東京方言は、全国で理解される。東京周辺のことばは、たとえ最初は使用範囲が地域的に限定されていても、すぐに、他地域方言話者を受け手とする場合にも用いられるようになる。これは、東京方言が、「全国共通語」として機能していることを意味する。その背景には、東京方言に威光が付与されているという事情がある。また、逆に、「全国共通語」として用いられることが、東京方言に威光を付与することにもなる。こうして、カジュアルな場面に対応する東京方言が、マスメディアで流されることにより、各地域方言に影響を与える。

しかし、「威光」や「全国共通語としての機能」だけでは、東京方言の影響を受ける言語事象と影響を受けない言語事象との差が何に起因するのかを説明できない。関西において東京方言の受容が起こっていない言語事象の例としては、本稿で見た指定辞ヤがある。そこで、本稿では、東京方言のダカラ・ダッテと同じ機能を有する形式が従来の関西方言にないことが受容の一因と考えた。他地域で同じ変化が見られるかどうか分かれば、より一般的な知見が得られるだろう¹³。

最後に、ダカラの受容には、「談話展開の方法」の変化も関与しているのではないかということ指摘しておく。久木田恵(1990)は、高年層話者による東京方言と関西方言の「談話展開の方法」を比較し、東京方言では「ダカラ」「ホラ」「ネッ」がキーワードとなって感情を込めた文を交えて説明を進める展開、関西方言では「それで」「そして」類の頻用で客観的説明を累加していく展開となっていることを見出した。『全国方言資料』で「だから」相当形式が少ないのは、このような談話展開方法のためと思われる。とすると、『方言談話資料』の話者Sにダカラが多いのは、この話者の談話展開方法が東京型に近いことの反映ではないだろうか。また、『若年層』でダカラが多いのは、関西若年層の談話展開方法が東京型に近づいたことの反映ではないだろうか。ここでは、久木田のような分析を行っていないため、これらの可能性を示唆するにとどまる。しかし、もし、談話展開方法の東京方言化が起こっているとすれば、それは関西方言にとって非常に大きな変化であると言えよう。

注

¹ 引用は、『日本名著全集 第十四巻 滑稽本集』(1927年、日本名著全集刊行会)に拠る。ただし、旧字体を新字体に改めた。

² 東北にはンダカラなど、最前部にンを持つ形式が広く分布するが、このンが指示語かどうか判断できない。GAJの解説(pp. 177-180)によれば、作図の際には指示語として扱っている。

³ 蓮沼(1991)の「独話型に還元可能な用法」と「独話型に還元不可能な用法」が、それぞれ、本稿の〈理由-帰結〉用法と非〈理由-帰結〉用法にほぼ相当する。しかし、蓮沼が(3)のような例を「独話型に還元不可能な用法」とする点は、本稿と異なる。

⁴ 加藤薫(1995)のあげた例で古いものは、映画『男はつらいよ 望郷編』のシナリオ(1970年公開、シナリオは1974年刊)の例(6)である。

⁵ 不明瞭なため、確例としなかった。

⁶ 訳が不自然だが、テキストのままにしておく。

⁷ ガ行鼻濁音の表記をガ・ギ・グ・ゲ・ゴにあらためた。

⁸ テキストでは「ジャ」とする。

⁹ ナラなどのナ系活用語尾・連用形中止法デ・ジャ・ヤ(ココジャナイ、など)以外の、全ての活用形(終止形ヤ、推量形ヤロー、過去形ヤツタなど)をあわせたもの。後出の表2も同様である。

¹⁰ 表2を見る限り男性にダカラが多いように見えるが、発話の量や話題がダカラの数に関与しているのかもしれない。

¹¹ この資料における接続助詞カラの使用については、真田(1999)がすでに指摘している。

¹² 接続詞ダッテの意味・機能については、蓮沼(1995, 1997), 沖(1996)の研究がある。

¹³ 小西(1999)は、富山県内のヤ・ジャ使用地域でダカラが使われることを指摘したが、用法については未確認である。

付記

本稿は3つの談話資料がなければ成り立たないものでした。資料の収録・作成に携わった方々に感謝いたします。また、録音テープの入手に関してご面倒をおかけした三井はるみ氏、草稿段階で有益なコメントを下さった鈴木芳明氏、中川美和氏、篠崎晃一先生、荻野綱男先生にお礼申し上げます。

引用文献

- 青木伶子 1981 「接続詞および接続詞的語彙一覧」『品詞別日本文法講座 6 接続詞・感動詞』3版 明治書院
- 沖 裕子 1996 「対話型接続詞における省略の機構と逆接 —「だって」と「なぜなら」「でも」—」中條修(編)『論集言葉と教育』和泉書院
- 加藤 薫 1995 「“原因・理由”を受けない「だから」—「だから」の主体的側面の突出—」『早稲田日本語研究』3
- 加藤正信 1974 「現代生活と方言の地位」『言語』3巻7号
- 金沢裕之 1998 『近代大阪語変遷の研究』和泉書院
- 久木田 恵 1990 「東京方言の談話展開の方法」『国語学』162
- 国立国語研究所(編) 1967 『日本言語地図』第1集 大蔵省印刷局
- 国立国語研究所(編) 1989 『方言文法全国地図』第1集 大蔵省印刷局
- 小西いずみ 1999 「富山県における指定辞デァ・ダ・ジャ・ヤの分布と変遷」『日本語科学』5
- 小林 隆 1996 「現代方言の特質」小林隆・篠崎晃一・大西拓一郎(編)『方言の現在』明治書院
- 真田信治 1996 『地域語のダイナミズム』おうふう
- 真田信治 1999 「ネオ方言の実体」『日本語学』18巻13号
- 田中章夫 1984 「接続詞の諸問題 —その成立と機能—」『研究資料日本文法』第4巻 明治書院
- 蓮沼昭子 1991 「対話における「だから」の機能」『姫路獨協大学外国語学部紀要』4

- 遊沼昭子 1995 「談話接続語「だって」について」『姫路獨協大学外国語学部紀要』8
- 遊沼昭子 1997 「「だって」と「でも」—取り立てと接続の相関—」『姫路獨協大学外国語学部紀要』10
- 前田 勇(編) 1964 『近世上方語辞典』東京堂出版
- 森田良行 1996 『基礎日本語辞典』7版 角川書店
- 山口堯二 1996 『日本語接続法史論』和泉書院
- 山口幸洋(編・監修) 1994-95 『NHK全国方言資料研究テキスト』(2)(3)
- 湯澤幸吉郎 1954 『江戸言葉の研究』明治書院
- 湯澤幸吉郎 1955 『徳川時代言語の研究』風間書房

(こにし・いずみ 東京都立大学助手)